

田原本町埋蔵文化財
調査年報

1998年度

8

1999

田原本町教育委員会

例　　言

1. 本年報は、田原本町教育委員会が1998年度（平成10年度）に実施した発掘調査及び試掘調査・立会調査の概要である。発掘調査については、重要な成果が得られたものについて別途、その概要報告書を作成中である。
2. 発掘調査は、本文第2表にまとめたように受託事業については原因者に、国庫補助事業については土地所有者に多大な理解と協力を賜った。
3. 本文に記載された遺構の記号については、SDが溝を、SKが土坑を、SRが流路を表す。
4. 遺物量は、幅34cm、奥行き54cm、深さ15cmのコンテナに収納した際の箱数で表す。
5. 本文で記載された弥生土器の時期は、藤田三郎・松本洋明1989「大和地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編I』（木耳社）による。
6. 調査、遺物整理にあたって、石野博信、今津節生、金関恕、河上邦彦、佐原真、寺沢薰、花谷浩、樋口隆康、森浩一、毛利光俊諸氏より多大なご教授を賜った。記して感謝の意を表します。
7. 本文の執筆は各調査担当者があたり、編集は清水琢哉が行った。

目 次

I. 1998年度の概要	1
II. 発掘調査の概要	
(1) 唐古・鍵遺跡 第68次調査	5
(2) 唐古・鍵遺跡 第69次調査	6
(3) 唐古・鍵遺跡 第70次調査	9
(4) 唐古・鍵遺跡 第71次調査	11
(5) 唐古・鍵遺跡 第72次調査	12
(6) 保津・宮古遺跡 第21次調査	14
(7) 保津・宮古遺跡 第22次調査	15
(8) 保津・宮古遺跡 第23次調査	18
(9) 羽子田遺跡 第14次調査	19
(10) 羽子田遺跡 第15次調査	20
(11) 羽子田遺跡 第16次調査	21
(12) 十六面・薬王寺遺跡 第14次調査	23
(13) 十六面・薬王寺遺跡 第15次調査	24
(14) 多遺跡 第18次調査	26
(15) 千代遺跡（日光寺推定地）第2次調査	28
(16) 小阪榎木遺跡 第2次調査	29
(17) 金剛寺遺跡 第4次調査	30
(18) 伊与戸遺跡 第1次調査	31
(19) 平野氏陣屋跡 第10次調査	32
(20) 田原本寺内町遺跡 第3次調査	33
(21) 田原本寺内町遺跡 第4次調査	34
III. 試掘調査・立会調査の概要	35

I. 1998年度の概要

1999年1月27日、唐古・鍵遺跡が国の史跡になった。昭和11・12年に行われた唐古池の第1次調査から今年度で72次を数え、64年の年月を経て実現した。遠い道程であったが、今後、田原本町は史跡地の公有化と保存整備に向けて進むことになる。

さて、本年度の発掘調査は21件である。1日～3日で終了した現場が7件あるため、実質的な件数は昨年より減少している。しかし、残る14件中には、9ヶ月間に及んだ唐古・鍵遺跡第69次調査などの大規模調査も含まれており、現場稼働期間は大きく増加している。また、出土遺物量においても、昨年度が遺物箱524箱に対して、今年度は1,337箱と倍以上に膨れ上がっている。その後にかかる整理期間も次年度送りになっている。したがって、その全容については把握しえないが、概要をまとめておく。

本年度の成果は、弥生時代から近世まであり、時期別にまとめておく。

弥生時代 唐古・鍵遺跡第69次調査の成果が特筆される。遺跡の南地区中枢部西側を区画するとみられる2重の溝が検出された。この地区の構造がより明確になってきた。また、大臼と大甕を枠にした集水施設や大形の井戸なども注目される。1月31日には現地説明会を行い、約700人の来場者を得た。出土遺物は多量で、なかでも鉄石英製管玉、青銅製腕輪破片、鐸形土製品、人形土製品などが注目される。

唐古・鍵遺跡第68次調査ではムラの西側の環濠を検出、第70次調査では前期河道と中期河道（北方砂層）を検出し、内陸部では出土例が知られない蛸壺が出土した。

この他、保津・宮古遺跡第22・23次、羽子田遺跡第15・16次調査でも弥生時代の遺構と遺物が検出された。

古墳時代 唐古・鍵遺跡第72次調査において、古墳の周濠を確認した。唐古・鍵遺跡では以前から埴輪等が出土しており、今回、初めてその実態が明らかになった。古墳の周濠からは馬や坐女、蓋の形象埴輪・朝顔形埴輪・円筒埴輪・鳥や笠、柱などの木製品等が良好な状態で出土した。周濠の形態から前方後円墳のくびれ部ちかくと考えられる。

羽子田遺跡第14次調査でも6世紀の古墳とみられる溝と蓋形埴輪を検出した。この周辺では、埋没古墳が多数存在することが判明ってきており、この羽子田古墳群のさらなる確認調査が必要とされる。

保津・宮古遺跡第22次調査では、滑石製模造品等の祭祀遺物が溝から多く出土したほか、6世紀末の井戸からは斎串が出土した。田原本町における古墳時代集落としては希有な遺構遺物であり、今後、遺跡の性格を把握する必要がある。

古代 保津・宮古遺跡第22次調査で掘立柱建物が検出されている。主に奈良時代のものとみられるが、その中には大形建物跡も存在するとみられる。本遺跡では、古道の側溝や斎串、人面墨書土器が検出されるなど官衙的な色彩もあることから、時期的変遷を含めて詳細な検討を要する。

中世 十六面・薬王寺遺跡第15次調査で室町時代ごろの大溝が検出された。国道24号線バイパス工事に伴う調査で検出された居館遺構とは一連のものである。溝底から和鏡1点が完形で出土した。

小阪複木遺跡では、鎌倉時代の井戸が検出された。本遺跡も中世の居館遺跡であり、その上限が鎌倉時代にあることが判明した。

保津・宮古遺跡第23次調査・平野氏陣屋跡第10次調査・金剛寺遺跡第4次調査などでも中

第1表 田原本町における埋蔵文化財発掘届・通知一覧表

	発掘届 57件の2	発掘通知 57件の3	96条の2		発掘	試掘	立会	計
1998年度 (平成10年度)	34	町4 県1	22	通知文	28		11	39
				実施分	町21 県1	0	10	32



田原本町の遺跡と発掘調査地点 (1 : 40,000)

第2表 1998年度発掘調査一覧表

法 諸 名	調査次数	調査地	原 因 者	原 因	調査期 間	調査面積	時 期	調査担当	備 考
1 唐古・鏡	第68次	田原本町 鏡356-34	伴戸克巳	個人住宅 の塗装	1998. 6. 4 ~ 6. 8	18m ²	弥生	豆谷和之	国庫補助事業
2 唐古・鏡	第69次	田原本町鏡170	田原本町	範囲確認 調査	1998. 7. 21 ~99. 3. 31	444m ²	弥生・古墳	轟田三郎 豆谷	国庫補助事業
		鏡170西側里道 及び水路	田原本町	道路改修		475m ²			建設課
3 唐古・鏡	第70次	田原本町 唐古531-1	安井宏光	個人住宅 の新築	1998. 9. 8 ~ 9. 18	100m ²	弥生・近世	清水隊	国庫補助事業
4 唐古・鏡	第71次	田原本町 鏡283-5	高崎豊實	個人住宅 の建築	1998. 11. 12 ~11. 13	16m ²	弥生	豆谷	国庫補助事業
5 唐古・鏡	第72次	田原本町 鏡181-1他	田原本町	用排水路 改修	1999. 1. 7 ~ 3. 7	285m ²	弥生・古墳	轟田	産業振興課
6 保津・宮古	第21次	田原本町 新町189-5	磯貝忠信	個人住宅 の建築	1998. 7. 1 ~ 7. 3	27m ²	古墳?	豆谷	国庫補助事業
7 保津・宮古	第22次	田原本町 宮古145他	田原本町	用排水路 改修	1999. 1. 11 ~ 3. 7	527m ²	弥生・古墳 古代	清水	産業振興課
8 保津・宮古	第23次	田原本町 保津128	岩田将司	個人住宅 の新築	1999. 2. 1 ~ 2. 6	25m ²	弥生・中世 近世	清水	国庫補助事業
9 羽子田	第14次	田原本町 新町125	吉村宏	分譲住宅 の建築	1998. 11. 16 ~11. 18	104m ²	古墳	清水	受託事業
10 羽子田	第15次	田原本町390-2	南和開発 株式会社	分譲住宅 の建築	1998. 11. 30 ~12. 10	107m ²	弥生・古墳 古代	清水	受託事業
11 羽子田	第16次	田原本町 新町210-1	日進不動 産株式会 社	分譲住宅 の建築	1998. 12. 15 ~12. 25	212m ²	弥生・古墳 古代	清水	受託事業
12 十六面・薬 王寺	第14次	田原本町 薬王寺471-1	竹島基量	個人住宅 の建築	1998. 6. 9 ~ 6. 11	10m ²	近世	豆谷	国庫補助事業
13 十六面・薬 王寺	第15次	田原本町 十六面204-1	エヌ・ティ・ ティ関西 移動通信 網株式会 社	無線基地 局の建築	1998. 7. 22 ~ 8. 10	88m ²	中世	清水	受託事業
14 多	第18次	田原本町 多568-1	多神社宮 多 忠記	神社拝殿 の建築	1998. 9. 28 ~11. 2	151m ²	近世	清水	受託事業
15 千代(日光 寺推定地)	第2次	田原本町 千代341-4	北林明美	個人住宅 の建築	1998. 8. 25	17m ²	中世	清水	国庫補助事業
16 小坂櫻木	第2次	田原本町 小坂330-2他	吉原 熟	個人住宅 の建築	1999. 3. 8 ~ 3. 24	91m ²	中世	清水	国庫補助事業
17 金剛寺	第4次	田原本町 金剛寺432-2	吉岡勇	個人住宅 の建築	1998. 7. 13 ~ 7. 21	35m ²	中世・近世	豆谷	国庫補助事業
18 伊与戸	第1次	田原本町 伊与戸187	礎城消防 署	防火構造 の建設	1998. 9. 2 ~ 9. 4	23m ²	近世	清水	受託事業
19 幸野氏跡	第10次	田原本町755-6	木村勝吉	個人住宅 の住宅	1998. 4. 20 ~ 4. 30	45m ²	中世・近世	清水	国庫補助事業
20 田原本寺内 町	第3次	田原本町24-1	田原本町	屋内運動 場の建築	1998. 6. 8 ~ 6. 24	210m ²	近世	清水	教育委員会總 務課
21 田原本寺内 町	第4次	田原本町 117-12	吉井マス 子	個人住宅 の建築	1998. 8. 3 ~ 8. 4	23m ²	-	豆谷	国庫補助事業

世の遺構が検出されている。それぞれの集落の形成過程を考える上で貴重な資料を得ることができた。

近世 平野氏陣屋跡第10次調査で南北方向の大溝1条が検出されている。絵地図では記載のない大溝であり、今後、周辺のさらなる調査が必要である。

多遺跡第18次調査では、多神社拝殿の建て替えに伴う調査をおこない、現拝殿基壇の下から近世前半ごろの本殿基壇跡を検出した。文献では天正年間に大造営をした記録があり、この時期の本殿に比定されると考えられる。

このほか、伊与戸遺跡第1次調査、唐古・鍵遺跡第70次調査で近世の成果があった。

(藤田・清水)

II. 発掘調査の概要

(1) 唐古・鍵遺跡 第68次調査

所在地 田原本町大字鍵字垣内356-34

調査原因 個人住宅の建築

調査期間 1998.6.4 ~ 6.8

調査面積 18m²

担当者 豆谷 和之

遺物量 1箱

位置・環境 唐古・鍵遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する弥生時代を代表する環濠集落である。その占有面積は約30万m²に達する。

今回の調査地は遺跡の西はずれにあたり、周辺部では過去に第41・62次の2件の調査が行われている。これらの調査から本調査区は、唐古・鍵遺跡の縁辺部と考えられ、環濠帯あるいはその外側である可能性が予想された。

検出遺構 弥生時代中期：大溝1条

大溝（SD-101）は、調査区のほぼ全面で検出されている。西肩が調査区西壁に沿っており、南北方向に向かうと思われる。東肩が調査区外にあるため、溝幅は不明であるが、現状で2mを超える。深さは、検出面から溝底まで約1mである。溝断面は逆台形を呈すると考えられる。その規模、形状、流路方向から環濠のひとつと考えられる。

出土遺物 大溝の堆積土は上層と下層の2層からなり、上層からは弥生時代後期の土器片が出土している。再掘削に伴う遺物の可能性がある。下層では弥生時代前期の土器片が目立つが、弥生時代中期の土器片も含まれていた。

まとめ 今回は、唐古・鍵遺跡で最も西側の調査となった。環濠と考えられる大溝を1条検出した。しかし、調査面積は狭く、溝の規模や時期に関する正確な情報を得られたとは言い難い。また、本溝は遺物量の希薄さから、外側の環濠と考えられるが、これよりも西側の環濠の有無については、明らかにしえなかつた。今後、継続的な調査を行い、唐古・鍵遺跡の西限を確定する必要がある。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (北から)



3. SD-101南壁

(2) 唐古・鍵遺跡 第69次調査

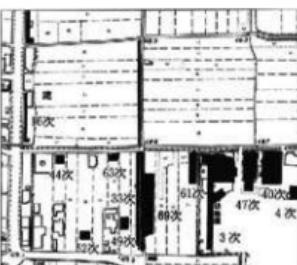
所在 地 田原本町大字鍵
 調査面積 919m²
 調査期間 1998.7.21～99.3.31
 調査原因 道路改良と範囲確認
 担当 者 藤田三郎・豆谷和之
 遺 物 量 約940箱

位置・環境 唐古・鍵遺跡の範囲確認調査は、本年度（平成10年度）で3年目をむかえる。いずれも、遺跡南地区での調査である。平成8・9年度は、弥生時代の青銅器生産の実態把握を目的として行った。これは、本年度調査地の北東側で行った平成9年度第65次調査において、炉跡と考えられる長方形の焼上面を検出したことにより目的をほぼ達成している。本年度は、その青銅器生産を管理していたであろうと考えられる微高地、集落南地区内部中枢の構造把握を目的として調査を行った。

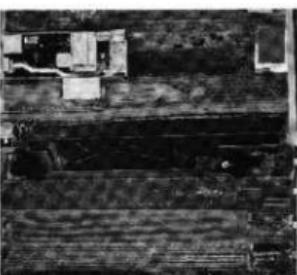
検出遺構 弥生時代前期：河道1条
 弥生時代中期中葉：土坑多数、溝多数
 弥生時代中期後半：環濠1条、区画溝2条、
 土坑多数、溝多数
 弥生時代後期：土坑多数、溝多数
 古墳時代前期：溝2条

出土遺物 弥生土器、石器、木器多数。特殊遺物として、銅鏡（2片）、銅鑑（2点）、鉄石英製管玉（1点）、碧玉製管玉（3点）、ガラス小玉（3点）、舞形土製品（3点）、人形土製品（1点）がある。

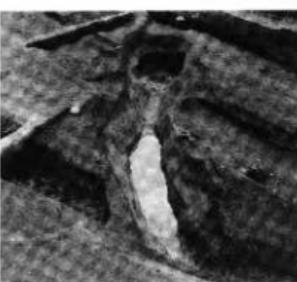
まとめ 今回の調査は面積も広く、その内容は多岐にわたる。そのなかでも特筆すべき遺構は、弥生時代中期後半の平行する南北溝2条である。この溝2条は南側で連結し、同時期に掘削された環濠に流れ込むことから、その計画性が窺える。溝は中期後半以降も再掘削を繰り返し、環濠とともに後期後半まで継続している。本調査地の東側にある微高地には唐古・鍵遺跡南地区の中枢部が想定される。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (右が北)



3. SK-1112, 1114完掘状況 (東から)



唐古・鍵遺跡の中枢部を 区画する溝

唐古・鍵遺跡第69次調査において、区画溝と考えられる並行する2条の南北溝を検出した。西側のものをSD-1101、東側のものをSD-1104とする。SD-1101は検出面で幅約1.0m、深さ約0.4~0.6m。SD-1104は検出面で幅約1.4m、深さ約0.6~0.8m。両者は、1.0~1.5mほどの幅をもって並行する。ただし、数回の再掘削が行われているようであり、両溝の間には何本も弥生時代後期の小溝が走っている。SD-1101と1104の南端は合流し、調査区南側で検出した環濠SD-1109に連結する。北端については、SD-1101と1104はとともに、環濠SD-1109から南へ約50mほどの地点で収束している。両溝の下層からは、弥生時代中期後半の上器が出土しており、環濠SD-1109の下層土器と同時期である。また、北端の収束部がSD-1101と1104ともに同じ位置であり、SD-1101と1104は環濠SD-1109とともに、計画性をもって掘削されたのであろう。

本調査地の東側には微高地があり、SD-1101と1104はその西端を区画していたと考えられる。区画された微高地は、周辺の調査から、ムラの中核部と考えられる。

Colum

1

唐古・鍵遺跡
第69次



土器と臼を利用した集水施設

建造物に石がほとんど使用されなかった弥生遺跡において、立体構造物を検出することは稀である。今回、唐古・鍵遺跡第69次調査において検出した、集水施設のSK-1130はその希有な1例である。

SK-1130は、中期の環濠と考えられるSD-1108の調査中に、その北側において検出している。本構造の特色は、その中心の集水構造物にある。集水構造物は、下から順に木製大臼、芝形大甕（大和形甕にタタキ、ケズリ手法を用いる土器）、大型受口短頭壺を組み合わせている。木製大臼は高さ50cm、径50cmを測り、胴部の四方に柱状の把手を削り残した優品である。これを逆さにし、薄くなった底部に穴をあけ、そこに底を打ち欠いた芝形大甕をのせていた。この芝形大甕の口縁部とややずれるが、組合った状態で大型受口短頭壺の口縁部を検出している。なお、木製大臼は当時から脆弱な状態にあったようで、木製大臼と掘り込んだ穴の間には、支えとして割った瀬戸内系甕と粘土塊が詰め込まれていた。

SK-1130は、砂層に掘り込まれており、脆弱な壁面の保護のため枠が必要としたのであろう。枠に使用された甕と短頭壺は、大和第三-3様式の特徴をもつ。

Colum

②

唐古・鍵遺跡
第69次

(3) 唐古・鍵遺跡 第70次調査

所 在 地 田原本町大字唐古字垣内531-1

調査面積 100m²

調査原因 個人住宅の建築

担当者 清水琢哉

調査期間 1998.9.8 ~ 9.18

遺物量 17箱

位置・環境 今回の調査地は現在の唐古集落の北側に位置し、弥生時代の環濠集落の北西端に該当する。西側隣接地では第66次調査が行われており、縄文晩期の上器と弥生時代前期前半の土器が自然河道から出土している。また、北側隣接地は周囲より一段高い畑地となっており、中世～近世の屋敷跡と推定されている。第66次調査でも屋敷地の南端を区画するとみられる溝と桶脚状遺構が検出されている。

- 検出遺構**
- ・弥生時代前期：河道1条
 - ・弥生時代中期：河道1条
 - ・中世：溝4条、土坑1条
 - ・近世：大溝1条

出土遺物 弥生時代前期～中期の弥生上器、室町時代の土師器・瓦質土器・白磁茶碗、近世の完形土師皿多数。

まとめ 今回の調査では、弥生時代前期と中期の河道を確認することができた。その位置と方向から、前期の河道は第1次調査の南方砂層と、弥生時代中期の河道は第1次調査の北方砂層とそれぞれ一連のものと考えられる。この中期の河道は、幅約10m、深さ1.1mで、弥生時代中期中頃～後半の遺物が出土した。

近世の遺構では、西側の66次調査で検出した大溝の続きを検出することができた。大溝からは多数の土師皿が完形で出土している。屋敷地側となる北肩付近での出土が目立った。



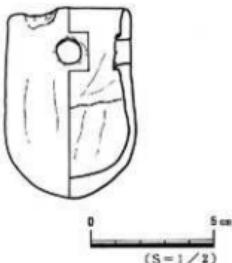
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 弥生前期の河道（西から）



3. 弥生中期の河道（北から）



唐古・鍵遺跡出土の飯蛸壺

唐古・鍵遺跡第70次調査では、弥生時代中期の河道（北方砂層）から飯蛸壺1点が完形で出土している。飯蛸壺は、大阪府池上曾根遺跡や兵庫県玉津田中遺跡で數十個が一つの土坑からまとまって出土するなど、沿海地域ではありふれた遺物である。しかし、飯蛸を捕獲するための土器であるため、内陸部での出土は希であり、これまで奈良盆地内での出土例は報告されていない。

出土した飯蛸壺は、高さ7.8cm、胴部最大径5.5cmで、口縁部からやや下がったところに穴が1カ所存在する。底部は丸底である。胎土分析はおこなっていないが、搬入品であろう。本品の時期は、河道出土の土器から大和第IV様式と考えられる。

唐古・鍵遺跡では、これまでにもハモやイワシなどの海洋魚、アカニシなどの巻貝、バフンウニなどの殻が出土している。これら海産物は、沿海地域との交流により運び込まれたものであろう。今回の飯蛸壺が完形品で出土していることを考えると、他の海産物同様、一連の交流の結果として飯蛸とともに容器として唐古・鍵ムラに持ち込まれたものかもしれない。

Colum

③

唐古・鍵遺跡
第70次

(4) 唐古・鍵遺跡 第71次調査

所 在 地 三原本町大字鍵字垣内283-5

調査面積 16m²

調査原因 個人住宅の建築

担当者 豆谷和之

調査期間 1998.11.12~11.13

遺 物 量 2 箱

位置・環境 今回の調査地の周辺部では、過去に第41・58・62次の3件の調査が行われている。これらの調査により、本地周辺が弥生時代においては集落内部西地区にあたり、中世には唐古・南氏居館の内部であったことが併明している。

また、本調査区の東側にあたる第58次調査では、現在の水路に沿った東西方向の中世大溝を検出している。この中世大溝は居館内部を区画していた溝と考えられている。今回の調査地は、この水路の北隣接地であり、同様の中世大溝の検出が予想された。

- 検出遺構**
- ・弥生時代前期：土坑2基（SK-101・102）
 - ・弥生時代中期：溝2条（SD-101・102）
 - ・近世：大溝1条（SD-01）

出土遺物 東西方向走る近世の大溝からは、上層でわずかな中世輸入陶磁器と近世国産染め付け碗が出土したのみである。

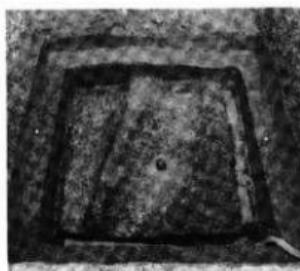
弥生時代中期の溝2条（SD-101・102）は、肩を接して南北方向に走行している。中期中葉の土器が出土した。その床面において、前期弥生土器を出土する土坑（SK-101・102）を検出している。

ま と め 今回、検出した近世大溝は、現在の地割りに沿ったものである。第58次調査で検出した現在の地割りに沿う中世大溝との関係が問題となろう。時間的な開きがあるが、両者ともに現在の地割りに沿っており、その関係は濃密なものと考えられる。

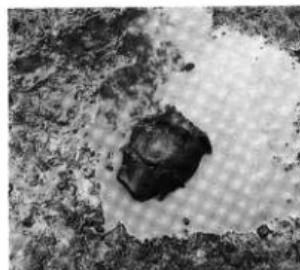
弥生時代の遺構も検出しているが、有機質を含んだ黒褐色土による遺物包含層の形成はなく、遺物量も少ないとから、集落の縁辺部である可能性が高い。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (南から)



3. SD-101土器出土状況

からこかぎ (5) 唐古・鍵遺跡 第72次調査

所 在 地 田原本町大字鍵字池田181-1他

調査面積 285m²

調査原因 用排水路整備

担当者 藤田三郎

調査期間 1999.1.7 ~ 3.7

遺 物 量 270箱

位置・環境 今回の調査地にあたる東南部では、ムラを問む中期から後期の環濠3条とそこに打ち込まれた橋脚から出入り口を確認している。

また、第65次調査地では、青銅器の工房区が、第69次調査地では主要施設を区画すると考えられる区画溝2条が検出され、南地区の重要性が判明しつつある。

検出遺構

- ・弥生時代中期中葉：落ち込み状遺構
- ・弥生時代中期後半：大溝1条・土坑・柱穴
　　～後期前半
- ・弥生時代後期後半：大溝1条
- ・古墳時代後期　　：前方後円墳？円墳周濠

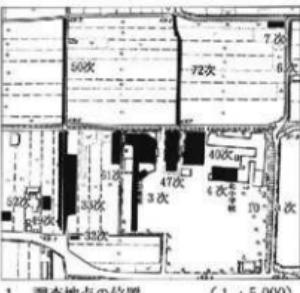
出土遺物

多量の弥生土器や石器、銅鏡、円筒・朝顔形埴輪、形象埴輪（巫女・馬・蓋）、須恵器、土師器、滑石製勾玉、木製品

まとめ 今回の調査地は、南地区の環濠からやや内部に位置する。遺跡全体からみれば、低地部分であり、中期中葉では幅10mにおよぶ落ち込み状遺構を調査区の北半で検出している。しかし、中期後半以降は、土坑などが存在し、居住遺構の拡がりがみられる。

弥生時代後期には、西南から東北方向に走行する大溝があり、第3・47次調査で検出した溝と一連であり、ムラ内部を区画するものと考えられる。本溝の中層から上層にかけては、多量の完形品を含む土器を検出している。

古墳時代は、調査区中央で復元径25mの円墳と考えられる周濠と、その北で前方後円墳のくびれ部あたりの周濠を確認した。周濠から出土した埴輪などは墳丘から崩落した状態を良好に示していた。これまでにも本遺跡では、埴輪等が出土していたが今回の調査によって、後期の古墳群の存在が明らかになった。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景（北から）



3. SD-106土器出土状況



弥生集落の上に築かれた古墳

今回の調査で注目されるのは、6世紀前半の古墳2基を確認したことである。調査区の中央やや北側で円墳（2号墳）の周濠、北端で前方後円墳（1号墳）と推定される周濠をそれぞれ検出した。両者とともに墳丘は削平を受けており、現地表からは確認できないものであった。ただし、周辺の小字名には、「上塚」「狐塚」など塚名があるので、古墳が中世段階までなんらかの形で意識として残っていたものであろう。

唐古・鍵遺跡の調査では、馬や鶏などの形象埴輪や円筒埴輪、須恵器などが出土している。これらの遺物は、おもに第11・19・38次調査の西地区、第26・59次調査の東地区、第40次調査の南地区東南部で見つかっている。また、1937年の鍵池の採土時にも馬形埴輪が出土しており、それらの遺物から古墳の存在が推定されていた。今回、遺跡のほぼ中央にあたる場所で、鍵池から北西に100mの地点である。水路東側の小字名は、「神子田」である。

1号墳の周濠からは、各種遺物が墳丘から順次崩れ落ちたような状態で出土した。墳丘側から外側に向かって、交差したような状態で長さ2m前後の細い棒、円筒・朝顔形・巫女形・馬形・蓋形の各埴輪、柱状・鳥形・笠形・桶形の各木製品などが出土している。

Colum

④

唐古・鍵遺跡
第72次

ほつみやこ
(6) 保津・宮古遺跡 第21次調査

所 在 地 田原本町大字新町字上浅田189-5

調査原因 個人住宅の建築

調査期間 1998.7.1 ~ 7.3

調査面積 27m²

担当者 豆谷和之

遺物量 1箱

位置・環境 保津・宮古遺跡は、田原本町大字保津および宮古に所在する遺跡である。これまでに、20次にわたる調査が行われており、縄文時代後期～中世にわたる各時代の遺構・遺物が検出されている。

今回の調査地は遺跡の東部部分にあたり、近辺では過去に第13次調査が行われている。第13次調査では、古墳時代の方墳周濠や弥生時代の方形周溝墓を検出している。今回の調査においても、弥生時代の遺構や埋没した古墳周濠の検出、あるいは現在の宮古集落内を東西に走る道路に近接していることから、古代道路側溝の検出が期待された。

検出遺構 時期不明：河道（SR-01）

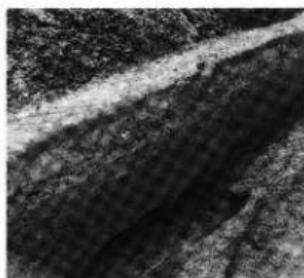
調査区のほぼ全域で検出した河道。東西方向に走行する。調査区の南辺に沿って、南岸を検出している。河幅を確定するため、調査区西端を北側に約4mほど延長したが、北肩を検出することはできなかった。河幅は6mを超えるのである。検出面から底面までの深さは約80cm。水流による底面の凹凸が激しいことから、河道と判断した。

出土遺物 球土中には、量は少ないが土器片が含まれる。弥生土器片が目に付くが、土師器片も含まれている。時期決定の手掛かりを欠く。

まとめ 今回の調査は、河道を1条検出したのみに止まる。河道の幅は6m以上を測り、保津・宮古遺跡の遺構分布状況に少なからぬ影響を与えていたものと考えられる。また、この河道は現行道路に平行しており、古代道路との関連も考慮に入れておく必要があろう。



2. 調査地全景（東から）



3. 河川跡北壁（南から）

(7) ほつみやこ 保津・宮古遺跡 第22次調査

所在地 田原本町大字宮古字坊ノ北浦145他
調査原因 用排水路整備
調査期間 1999.1.11～3.7

調査面積 527m²
担当者 清水琢哉
遺物量 50箱

位置・環境 今回の調査は、遺跡の西端、第10次調査の西側隣接地で行われた。第10次調査では、弥生時代後期の土坑や、古代の溝・土坑・建物等が検出されており、本調査地でも一連の遺構が検出されることが予想されていた。ただし、総延長280mの水路工事に伴う調査であり、西側調査区の遺構密度は低くなることが予想されていた。

検出遺構

- ・弥生時代後期：土坑4基、溝2条
- ・古墳時代：井戸2基、溝1条
- ・古代：井戸1基、溝5条、掘立柱建物跡
- ・中世：素掘小溝群

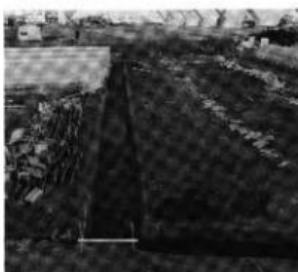
出土遺物 弥生時代後期では、土坑から完形土器群が出土した。古墳時代では、SK-4104の井戸から5世紀の須恵器・土師器が出土した。SD-4102では、多量の白玉・有孔円板等の滑石製模造品やミニチュア土器を含む完形土器群、小鉄片、馬骨が出土した。井戸SK-1102では、6世紀後半の斎串、完形の須恵器等が出土した。古代では、調査区西側を中心とし飛鳥時代～奈良時代の土師器・須恵器・瓦を検出した。

まとめ 弥生時代については、後期の遺構を検出しているが、密度は高くない。

古墳時代中期～後期の集落が調査地西側で検出された。また、8世紀代の掘立柱建物群も調査地西半で検出された。本調査地の南東では須恵器円面鏡や人面墨書き土器等が出土しており、官衙的な遺構を想定する必要があるかもしれない。北側400mの第4次調査地点で検出された7世紀の建物群との関連を含め、検討していく必要があるだろう。



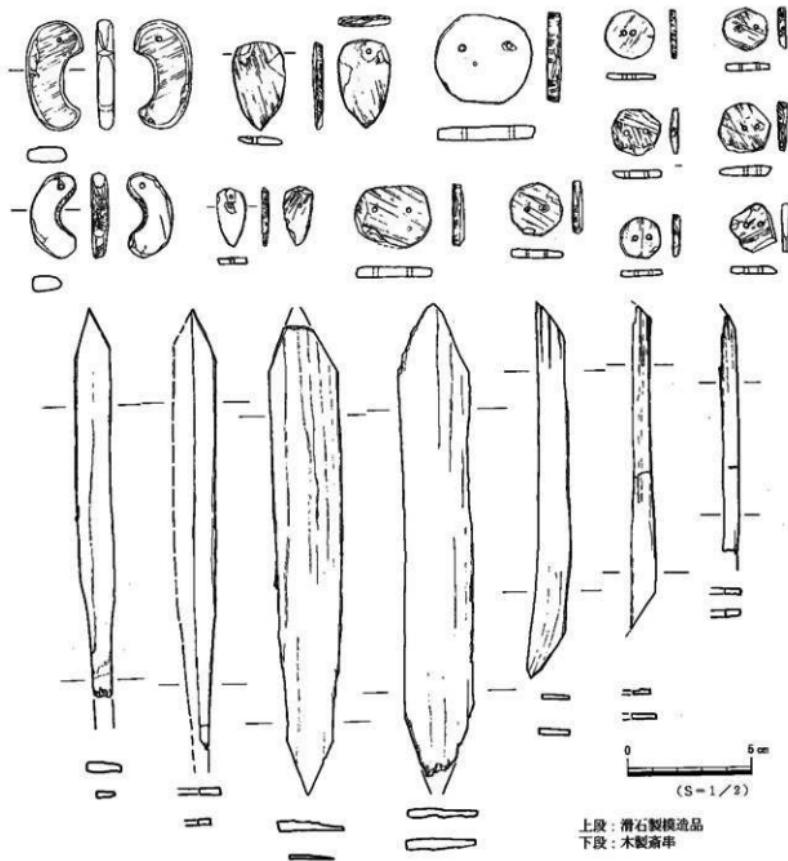
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 第2トレンチ全景（南から）



3. 第4トレンチ全景（西から）



古墳時代の祭祀遺物

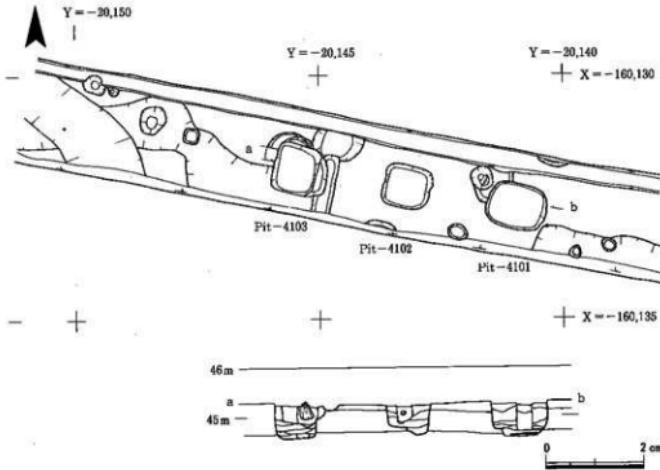
Colum

5

今回の調査では、古墳時代の祭祀関連遺物が出土した。1つは6世紀初頭の滑石製模造品、もう1つは6世紀後半の斎串である。

西北西－東南東方向の溝SD-4102からは、滑石製模造品・馬の骨(頸)、小鉄片、ミニチュア土器を含む土器群が出土した。滑石製模造品の内訳は、臼玉約600点、勾玉2点、剣形品2点、有孔円板17点である。

井戸SK-1102からは、木製斎串7点、鋤先破片1点、完形品を含む土器群が出土した。6世紀後半の斎串は、比較的古い例となる。



奈良時代の建物跡

今回の調査では、奈良時代の建物跡の柱穴を多く検出している。SB-4101は、第4トレンチ中央で検出した掘立柱建物跡である(上図)。検出された柱穴は、西北西-東南東方向にならぶ2間分3基で、1間2.2mである。柱穴は、東西1~1.2m、南北1.2m、深さ0.7mを測る。西側のPit-4103では、直径30cmの柱痕が残る。また、東側のPit-4101では礎板が検出された。

このほか、第4トレンチ西半にも比較的大きな柱穴が集中しており、この部分にも数棟の掘立柱建物が建っていたと考えられる。

一方、第2トレンチ中央、第4トレンチ東半には、0.35m×0.25m前後の小規模な柱穴を多く検出している。このうち第2トレンチ中央では、北北東-南南西方向にならぶ3間分4基の柱穴が建物跡となるとみられる。1間1.2mで、柱穴の深さは約0.3mを測る。遺物が多くみられることから、これも奈良時代頃の建物跡になることが予想される。

(8) 保津・宮古遺跡 第23次調査

所 在 地 田原本町大字保津字村内垣内128

調査原因 個人住宅の建築

調査期間 1999.2.1 ~ 2.6

調査面積 25m²

担当者 清水琢哉

遺物量 2箱

位置・環境 今回の調査地は、保津環濠集落内部の中央南側に位置する。東側隣接地では第15次調査が行われており、中世・近世の遺構が濃密に拡がっていることが確認されている。また、弥生時代前期～中期初頭の遺構も検出されており、本調査地付近が保津・宮古遺跡の前期弥生集落の動向を知る上でも重要な地区となることが予想されていた。

検出遺構

- 弥生時代中期初頭：小溝1
- 弥生時代中期：大溝1、小溝2、土坑1
- 中世～近世初頭：大溝1、土坑4
- 近世後半～近代：小溝1、土坑3、柱穴
多数

出土遺物 弥生時代中期初頭の土器片が数点出土した。また、弥生時代中期後半の溝からは甕の破片が、土坑1基からは半円形の甕1点が出土した。

中世の土坑からは瓦器碗等の小片が多く出土した。近世初頭の土坑からは、天目茶碗等の陶器・瓦質土器等が出土した。

ま と め

保津・宮古遺跡では、弥生時代前期～中期前半の集落の状況が不鮮明である。第15次調査で検出された土坑など、わずかな遺構しか検出されておらず、本調査地付近で小規模な集落を構成するのか、さらに集落が東に拡がっているのかを解明する必要があるだろう。

中世の遺構も多く検出された。調査地東半の大溝は集落内部を区画するとみられるが、小面積の調査であるため第15次調査地との関連を含めて、集落構造を解明するには至らなかった。

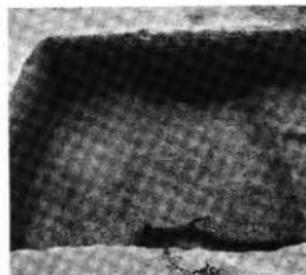
近世の遺構も、建物の柱穴の一部が調査されたことにとどまった。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景（西から）



3. 中世大溝（北から）

(9) 羽子田遺跡 第14次調査

所 在 地 田原本町大字新町字戌亥125

調査面積 104m²

調査原因 分譲住宅の建設

担当者 清水琢哉

調査期間 1998.11.16~11.18

遺 物 量 2箱

位置・環境 羽子田遺跡は標高48m前後の沖積地に立地する。遺跡は、弥生時代中期～古墳時代前期の集落、古墳時代前期～後期の古墳群で構成される。

今回の調査地は遺跡の西端に位置する。周囲の調査では、北東50mで古墳時代前期末の集落遺構が検出されている一方、南東100mでは古墳時代後期の方墳が検出されている。このことから、今回の調査でも古墳群または集落関連の遺構が検出される可能性が考えられていた。

検出遺構 試掘坑を4カ所設定したが、遺構は南端のトレンチのみで確認された。南端のトレンチを拡張した結果、古墳周濠とみられる北北西～南南東方向の溝が検出された。トレンチ北側で北東方向に分岐している。溝の規模は幅3.6m、深さ0.8mである。北東に分岐した溝は幅2.4m、深さ0.4mと規模が小さい。

なお、北側3カ所の試掘坑では、中世ごろの粘質土の堆積が確認されたのみである。

出土遺物 溝の分岐点の南東隅で、蓋形埴輪の蓋部が半完形で出土した。円筒埴輪も出土しているが、溝の東肩付近に落ち込んでいるものが多い。

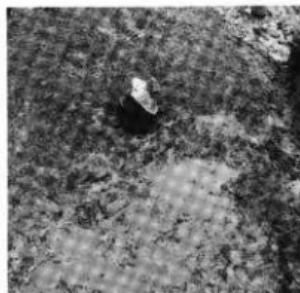
まとめ 今回の調査では、調査地南端で古墳周濠とみられる溝が検出された。遺物の出土状況等から、分岐する溝の南東部分が古墳になると推測される。分岐点の北東側は中世段階では微低地となっており、この部分に古墳が存在したとは考えにくい。ただし、溝は北北西にさらに延びており、埴形については明確にし得なかった。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (北から)



3. 墓輪出土状況

はごた (10) 羽子田遺跡 第15次調査

所在地 田原本町字東羽子田390-2

調査面積 107m²

調査原因 分譲住宅の建築

担当者 清水琢哉

調査期間 1998.11.30～12.10

遺物量 1箱

位置・環境 今回の調査地は、遺跡中央南側に位置する。西側隣接地では第9次調査が行われており、古墳とみられる溝を検出している。

検出遺構 第3遺構面では、河道2条を検出した。1条は南北方向で、幅3m以上、深さ0.6mを測る。弥生時代中期ごろの土器片を含む。もう1条は南南東～北北西方向の河道で、幅約6m、深さ0.8mを測る。弥生時代前期ごろの土器片を含む。

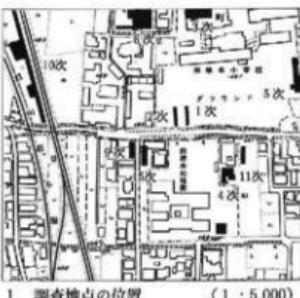
第2遺構面では、溝2条、河道2条を検出した。SD-101は南南東～北北西方向の溝で、幅1.6m、深さ0.4mを測る。古代と考えられる。SD-102は南東～北西方向の溝で、幅1m、深さ0.2mを測る。遺物が少ないため時期は不明である。2条の河道は、いずれも南南東～北北西方向で、幅4～4.5m、深さ0.6mを測る。時期は古代であろう。

第1遺構面では、中・近世の素掘小溝、近世の大溝1条を検出した。

今回の調査地では、いずれの遺構からも土器小片が少量出土したのみである。

まとめ 今回の調査では、西側で隣接して行われた第9次調査の古墳と推定される溝の続きを検出することができなかった。第9次調査地の東側は北西～南東方向の古代の河道に切られているため、本調査地では河道のために古墳の遺構が失われているとみられる。

古代の河道の下から、弥生時代前期の遺物を含む河道を検出した。調査区全体が河道堆積であるため詳細は不明であるが、弥生時代前期の土器が出土したことから、調査地の上流に集落が存在した可能性も考えられる。



2. 調査地全景（北から）：第3遺構面



3. 調査地全景（北から）：第2遺構面

はごた (11) 羽子田遺跡 第16次調査

所在 地 田原本町大字新町字エヌ210-1

調査面積 212m²

調査原因 分譲住宅の建築

担当者 清水琢哉

調査期間 1998.12.15～12.25

遺物量 5箱

位置・環境 今回の調査地は遺跡の西側に位置する。また、調査地南側に隣接して古代道路の存在が推定されている。東側約50mで行われた第10次調査では、古墳時代中期～後期の古墳周濠を検出しているほか、古墳時代前期の埴輪の散布を確認している。また、北東約100mで行われた第7次調査（試掘）では、弥生時代中期前半の壺や古墳時代後期の方墳などを検出している。

検出遺構 調査地北端で落ち込み状遺構が検出されている。弥生時代中期中頃であろう。

古墳時代の遺構としては、庄内式ごろの浅い溝状遺構を1条検出した。また、5世紀ごろの溝1条、6世紀ごろの落ち込み・溝各1条などを検出した。

古代の遺構としては、西北西～東南東方向の溝を2条検出した。古代の道路側溝となる可能性が高い。

出土遺物 古墳時代の浅い溝状遺構からは、半完形の須恵器壺蓋2点が重なって出土した。また、落ち込みからは古墳時代前期の埴輪片も多く出土しているが、後期の須恵器も含んでおり、二次的な堆積とみられる。

古代の溝からは、奈良時代の土師器壺1点が出土している。ただし、同時期の遺物はほとんど出土していない。

まとめ 今回の調査の結果、本調査地南半に古代の道路が存在した可能性が高まった。

本調査地では古墳を明確にとらえることができなかった。可能性のある溝も検出されているが、小面積の調査であること、出土遺物が少ないとなどから断定するには至っていない。



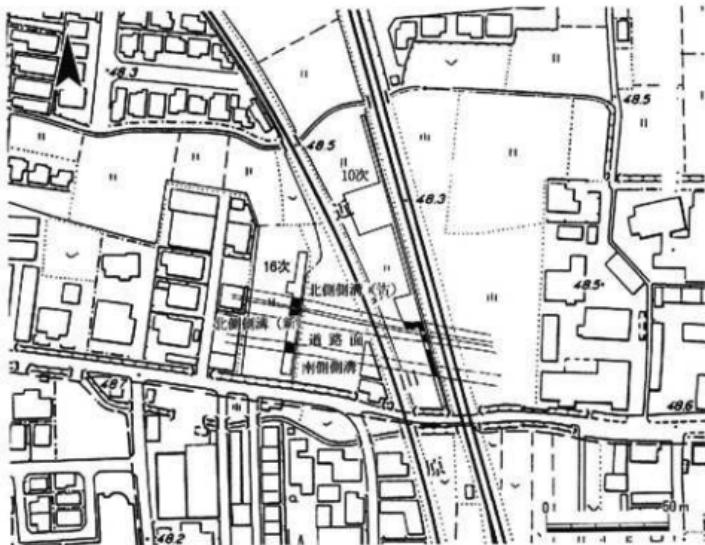
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全貌 (北から)



3. 道路状遺構 (北から)



羽子田遺跡の古代道路

最近の調査で、田原本町大字宮古・新町と大字保津領の境界にある現在の道路下に、古代の道路が存在することが判明してきた。この道路跡は、現在の土地区画から、西は大字富本まで、東は大字阪手付近までその痕跡がたどれる。このことは、下ッ道と筋違道をつなぐアクセス道路であることを意味している。

今回の第16次調査で、古代道路の側溝とみられる遺構を検出した。南側側溝と推定されるSD-101は、幅4m、深さ1mの西北西—東南東の溝である。中層から奈良時代ごろの土師器環が完形で出土した。上層断面から、再掘削が行われているとみられる。

北側側溝と推定されるSD-102は、再掘削により徐々に南側へその位置をずらしている。そのため、溝間に想定される道の幅も徐々に狭まり、当初14.5mあったものが10.5mになり、最終的には9m程度に縮小していったようである。

当初のSD-102Cは、幅2.5m、深さ1.2mを測る。この溝の埋没後、南肩を切る形でSD-102Bが掘削される。推定幅4m、深さ1mを測る。この溝は、さらに南側に若干ずれた位置で再掘削が行われる(SD-102A)。幅4.5m、深さ0.8mを測る。

Colum

7

羽子田遺跡
第16次

(12) 十六面・薬王寺遺跡 第14次調査

所 在 地 田原本町大字薬王寺471-1

調査面積 約10m²

調査原因 個人住宅の建築

担当者 豆谷和之

調査期間 1998.6.9 ~ 6.11

遺物量 1箱

位置・環境 今回は現薬王寺集落内の調査であり、周辺では過去に第6・11・12次の3度の調査が行われている。第6次では、古墳時代前期の方形周溝墓や中世のピット群を検出している。第11次では、古墳時代前期の円形周溝墓や古代～中世の井戸や土坑を検出している。また、両次調査とも、北に流路方向をもつ弥生時代の河川跡を検出している。以上のことから、現薬王寺集落内は比較的の低く、弥生時代には網状に河道が流れ込んでいたと考えられ、今回の調査地がその河道内にあたることも予想された。

なお、調査地一帯は、薬王寺廃寺の範囲に比定されている。

検出遺構 古墳時代：河道

近世：土坑4基（SK-01・02・03・04）

溝1条（SD-01）

SD-01は調査区の北端で検出した東西方に向かう軸をもつ近世溝の南肩。屋敷地を区画した道路側溝の可能性が考えられる。

出土遺物 上師器・瓦器・近世磁器

まとめ 検出した遺構はいずれも近世のもので、数も少ない。これらの遺構は、近世に持ち込まれたと考えられる客土層の上から掘り込まれている。近世以前は安定した土地ではなかったらしく、洪水層と考えられる砂層堆積を確認した。また、この洪水層の下もシルトと粘土の堆積層であり、調査区を含めた付近一帯が河道内であったと考えられる。

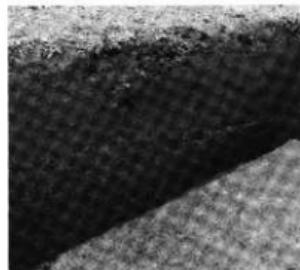
また、中世の遺物である瓦器甕や瓦は検出しているが、遺構は見当たらず、薬王寺廃寺の手掛かりを得ることはできなかった。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (北から)



3. 西壁上層断面

(13) 十六面・薬王寺遺跡 第15次調査

所在地 田原本町大字十六面字ヲヤ垣内204-1 調査面積 88m²

調査原因 無線基地局の建築

担当者 清水琢哉

調査期間 1998.7.22~8.10 遺物量 6箱

位置・環境 今回の調査地は、遺跡中央に位置する。東側隣接地で行われた第1次調査との関係により、本調査地付近が14~15世紀ごろの環濠集落の西端となることが予想されていた。また、古代の水田跡が付近の調査で検出されており、本調査地でも水田跡を検出する可能性が考えられていた。

- 検出遺構**
- 古墳時代~古代: 水田跡
 - 平安~鎌倉時代: 小溝、土坑1基
 - 室町時代: 溝3条、掘立柱建物1

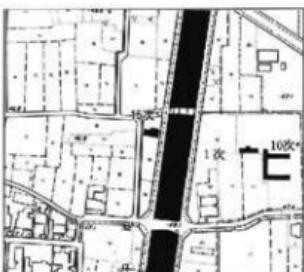
出土遺物 土師器・須恵器・瓦器・和鏡

まとめ 古墳時代末~古代とみられる水田遺構が本調査区でも検出された。ただし、周辺の調査区と比較して残存は不良で、畦畔も水田面を埋める洪沢堆積の砂層による削平が著しい。

砂層を切って掘削される平安時代ごろの小溝は、下層の水田遺構と同様に北西~南東方向の斜行条里となっていた。調査地周辺も条里施行が遅れた地域となるようである。

調査地南東端で鎌倉時代ごろの土坑が検出されている。推定径1.8m、深さ1.5mを測り、井戸と推定される。第1次調査の成果から、環濠をもたない集落が豪族居館成立に先立つて形成されていたと考えられる。

今回の調査により、第1次調査で検出されていた豪族居館の西側環濠を確認することができた。溝幅約4m、深さ0.7mを測る。出土した瓦器等の時期から、14世紀ごろの遺構であると考えられる。なお、この溝からは青銅製の和鏡が完形で出土している。



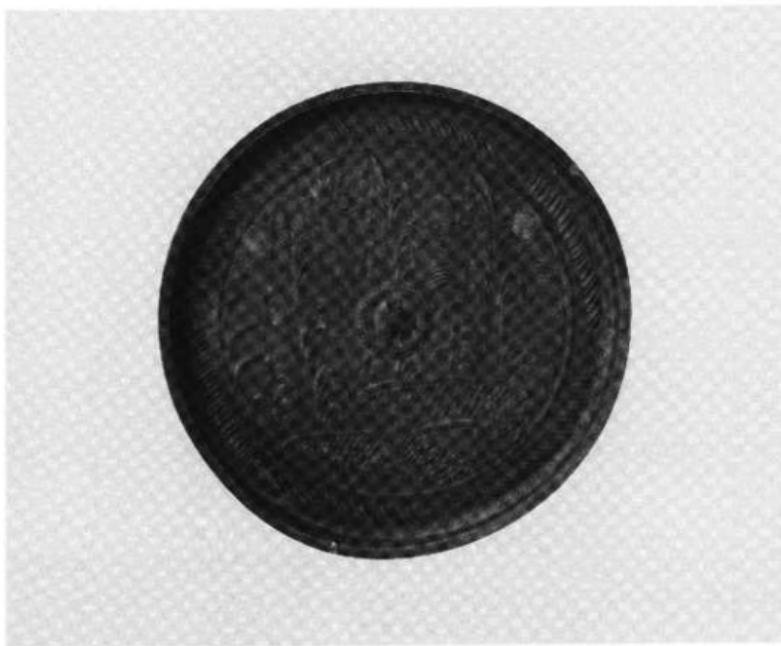
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景（東から）：古代



3. 調査地全景（東から）：中世



中世の大溝から出土した和鏡

室町時代ごろの豪族居館を開む溝の底から、青銅製の和鏡が1点完形で出土した。「洲浜双草双雀文鏡」で文様は形式的で退化している。また、鋳上がりが不良なのか、磨滅しているのか、全体的に文様は不明瞭である。面径98mmを計る。幅2mm、高さ5mmの縁がやや外反ぎみにたちあがる。鏡背面は1条の円圏により幅8mmの外区と内区に分かれ、外区には列点が施される。列点は20~28個を1単位として6つの単位にわかれている。中心には直徑15mmの紐座がつき、その周縁には珠文がめぐり、中央には小さな紐がつく。紐孔は鏡背文様に対して縦方向にあけられている。なお、奉納の時などに壁に打ちつけたとみられる穿孔が2ヶ所あるが、鋲掛けで塞いでいる。このような鏡がなぜ本遺跡の大溝から出土したのか、類例の検討を要する。

共伴する瓦器甕は14世紀ごろと考えられることから、この鏡の廃棄年代は14世紀ごろと考えられる。

Colum

8

(14) 多遺跡 第18次調査

所在 地 田原本町大字多568-1

調査面積 151m²

調査原因 神社拝殿の改築

担当 者 清水琢哉

調査期間 1998.9.28~11.2

遺 物 量 12箱

位置・環境 多遺跡は、標高50m前後の沖積地に立地する。これまで17次にわたる発掘調査が行われており、弥生時代・古墳時代の集落跡であることが確認されている。

今回の調査は、多遺跡中央に位置する式内大社多坐弥志理津比古神社の拝殿部分で行われた。多神社は、本殿棟木に享保貳拾年の墨書きがあり、拝殿の鬼瓦には宝暦九年の銘があることから、享保～宝暦年間に大造営が行われたことが判明している。また、寄進帳などの文献から天正～慶長年間にも大造営が行われたことが判明している。

検出遺構 東西8間、南北2間の拝殿の基壇を調査した。その下層から1間四方の礎石建物跡4棟が検出された。

出土遺物 表土から寛永通宝、鉄釘・瓦等が出土した。また、近世の瓦が礎石・延べ石の裏込めに使われており、円礎に混じって出土している。

近世前半の基壇直上面では、土師皿破片が出土している。また、近世前半の基壇を埋め立てる際の造成土に寛永通宝が含まれていた。

基壇の断ち割り調査では、基壇の造成土下の包含層から古代の土師器・須恵器が出土した。また、基壇の版築土内には弥生時代後期末～庄内期ごろの遺物が多く含まれていた。

まとめ 今回の調査は、多神社拝殿の構造を把握することを主目的に行った。その結果、近世の多神社の変遷を考える上では極めて重要な知見を得ることができた。おそらく天正期の造営となる本殿を江戸中期に改築する際に、北側に新規の本殿を建築したとみられる。そして、旧本殿基壇を利用して拝殿の建築を行ったと考えられる。



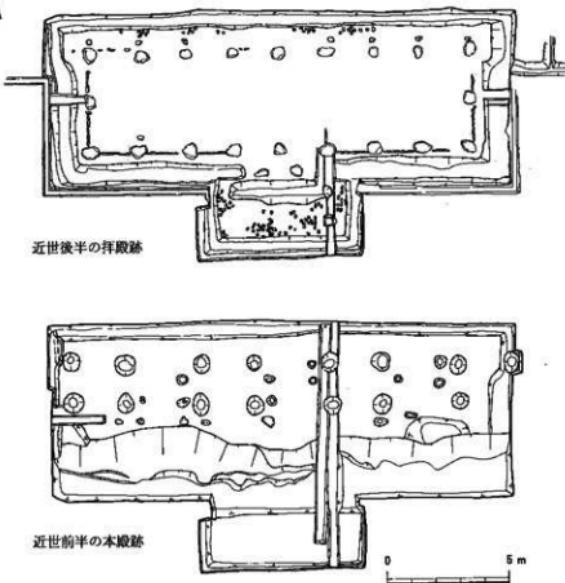
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 近世後半の拝殿基壇（西から）



3. 近世前半の本殿の基壇（西から）



多神社の変遷

今回の調査の結果、現在の拝殿の位置に旧本殿が存在したことが明らかとなつた。旧本殿は、現在の本殿と同様に1間社が四棟東西に並ぶ形態である。礎石は抜き取られていたが、その下には拳大の円礎が充填されていた。また、四棟の建物にはそれぞれ東西と南側に高欄を支えていたとみられる柱穴（または礎石）が付属する。建物の規模は、主柱穴間が東西2.2m、南北1.7mを測り、これに0.7m前後張り出す形で高欄の柱穴が東西と南側に巡っている。この建物の建築時期は、遺物が少ないため明らかでない。ただし、天理図書館所蔵の天正二十年の勤進帳などから、天正～慶長年間に大造営が行われたことが判明している。今回検出された旧本殿は、この時に造営された可能性が高い。

この建物の基壇を利用して、近世中期の拝殿が建てられた。本殿の段階より0.2mの盛り土がなされ、当初は主柱の礎石間に平瓦を立て並べていたが、後に基壇の周囲を延べ石で覆った際に漆喰の被覆下に埋没した。

Colum

9

多遺跡
第18次

(15) 千代遺跡（日光寺推定地） 第2次調査

所在 地 田原本町大字千代字和佐田341-4

調査原因 個人住宅の建築

調査期間 1998.8.25

調査面積 17m²

担当者 清水琢哉

遺物量 1箱

位置・環境 千代遺跡は、標高50m前後の沖積地に位置する。遺跡の西端には、小字等から中世寺院「日光寺」があったと推定される。1990年に行われた第1次調査では、平安時代後期と鎌倉時代の井戸、掘立柱建物などが検出されている。特に鎌倉時代の掘立柱建物は瓦葺きであった可能性があり、寺院との関連の可能性が考えられる。

今回の調査は、第1次調査地点の北側70mで行った。調査地はすでに宅地造成が行われておらず、道構面までの深さが2mに達した。このため、調査面積は極めて小さいものとなつた。

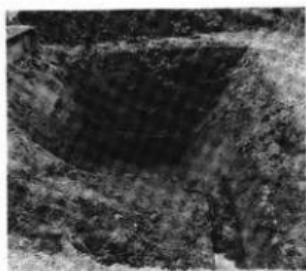
検出遺構 中世の素掘小溝が2条検出された。いずれも東西方向で、溝幅0.2m、深さ0.1mを測る。

出土遺物 中世包含層から瓦器塊小片などが出土した。

まとめ 今回の調査は、遺構の有無を確認する程度の調査にとどまった。その結果、素掘溝は確認されたものの、中世寺院の存在を裏付けるようなまとまった遺構は認められなかった。層序堆積でも、ベース層の検出位置が第1次調査地点と比較して深く、第1次調査地点東半にみられた微高地が本調査地には括がっていないことが考えられる。これらのことから、本調査地は日光寺の範囲からはずれていると考えられる。今後の調査により、第1次調査地と本調査地との間に遺跡の北端を求める必要がある。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景（東から）



3. 中世遺構検出状況（南から）

こさかよのき (16) 小阪榎木遺跡 第2次調査

所 在 地 田原本町大字小阪字細長330-2、333-1

調査面積 91m²

調査原因 分譲住宅の建築

担当者 清水琢哉

調査期間 1999.3.8～3.29

遺物量 4箱

位置・環境 小阪榎木遺跡は標高48m前後の沖積地に立地する。前年度に行われた第1次調査では、室町時代の居館跡の西側を区画するとみられる大溝を検出した。今回の調査地は、第1次調査地の西側に隣接するが、居館を開む環濠の外側に予想されることから、遺構が希薄である可能性が考えられていた。

検出遺構 平安時代末～鎌倉時代初頭とみられる井戸2基を検出した。また、調査地南西部で弥生時代後期の浅い落ち込み状遺構を検出した。この下面には足跡とも考えられる小さな窪みが多くみられ、水田の可能性も考えられる。

出土遺物 井戸SK-51から完形の瓦器小皿や瓦器碗等が計3点出土した。

弥生時代後期の落ち込み状遺構からは、半完形の小形長頸壺1点が出土した。

まとめ 小阪榎木遺跡の中心となる室町時代の遺構は、今回の調査では確認されなかった。第1次調査で検出された中世大溝が室町時代の居館の西側を区画する環濠となると考えられる。その一方で、今回の調査では平安時代末～鎌倉時代初頭の井戸が検出されている。これは、環濠を伴わない段階の遺構と考えられ、居館形成に先立って集落が存在したとみられる。

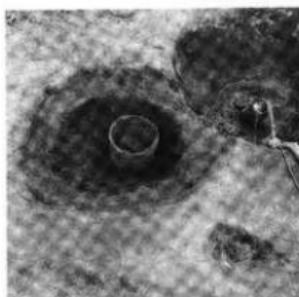
弥生時代後期の落ち込み状遺構は、その状況から水田の可能性も考えられる。その場合、半完形で出土した小形長頸壺は水田に供獻されたものである可能性も考えられる。本調査地の北側700mには弥生時代の拠点集落古・鏡遺跡があり、その生産域となる可能性を含めて今後も検討していく必要があろう。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (北から)



3. 井戸 SK-53の井戸構造

(17) 金剛寺遺跡 第4次調査

所在 地 田原本町大字金剛寺字阿弥陀院432-2

調査面積 35m²

調査原因 個人住宅の建築

担当者 豆谷和之

調査期間 1998.7.13~7.21

遺物量 1箱

位置・環境 金剛寺遺跡は、標高47m前後の沖積地に立地する。第3次までの発掘調査では、古墳時代の溝と住居址、古代の河川跡と、中世豪族居館の環濠が検出されている。今回は現金剛寺集落内の調査であり、第1次調査地の南側にある。第1次調査地は「土手矢倉」という小字名を有し、中世豪族居館の環濠とともに、出入り口になると考えられる橋脚を検出した。第1次調査地の北側に居館の本体があると考えられ、今回の調査地はその外側になることが想定された。しかし、今回の調査地の小字名は「阿弥陀院」であり、明治7年に廃寺になった「阿弥陀寺」の関連遺構、遺物が検出される可能性があった。

検出遺構 中世：溝2条（SD-01、02）、礎石

近世～近代：井戸2基（SE-01、02）

柱穴2基（Pit-01、02）

出土遺物 土師器、須恵器、瓦器、中・近世陶磁器など。

なお、上面が中世遺構面となる褐色シルト層中より、古墳時代の土師器を検出している。

まとめ 「阿弥陀寺」を積極的に語る遺構・遺物は検出されなかった。1点の布目瓦片がある。検出した遺構のうち、溝2条（SD-01・02）は中世金剛寺域に伴う遺構であろう。注目すべきは、この中世遺構上に厚さ約80cmにおよぶ客土がなされて、近世遺構面が形成されていることである。廃城後に、大規模な土地改変をうけた可能性がある。これらの客土は付近の土砂を採集したものと考えられ、その中には多量の瓦器や土師器小片が含まれている。金剛寺域あるいは阿弥陀寺の形成時期を考えていく手掛かりになる。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景（南東から）



3. 土器出土状況

(18) いよど 伊与戸遺跡 第1次調査

所 在 地 田原本町大字伊与戸字北垣内187

調査面積 23m²

調査原因 防火水槽の建設

担当者 清水琢哉

調査期間 1998.9.2 ~ 9.4

遺物量 2箱

位置・環境 伊与戸遺跡は、初瀬川左岸の標高55m前後の沖積地に立地する。平安時代から室町時代ごろの遺物散布地として認識されていたが、これまで顕著な開発行為はみられず、発掘調査が行われるのは今回が初めてである。

周辺の小字名をみると、調査地を含む現在の伊与戸集落は「北垣内」といい、その南に隣接する地区を「門ノ前」という。13世紀に鋳造された個人蔵の梵鐘の銘に森屋郷新楽寺の名がみえるが、その推定地を伊与戸とする説があり、注目される。

今回の調査地は、昭和後期まで掘となっていた部分であり、近世以来の集落を囲む環濠である可能性も考えられていた。

検出遺構 調査地全体が大溝の内部であった。トレチの東西幅が4.6mであるため、溝はそれ以上の幅をもつと考えられる。溝の深さは、現地表面から1.7mである。最下層が近世末～近代ごろ、上層が現代の堆積である。ただし、当初の掘削の時期はさらに遡る可能性がある。

溝が掘削される以前の遺構として、河道の堆積が確認された。調査地の東側約150mに流れる初瀬川の旧氾濫原の可能性がある。遺物が出土していないため、河道の時期は不明である。

出土遺物 大溝からの出土遺物には、近世末～現代の瓦・陶磁器などがある。

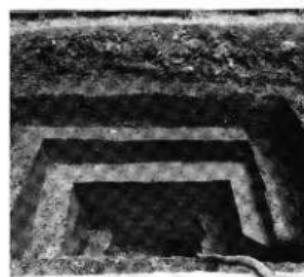
まとめ 今回の調査では、伊与戸集落の旧環濠を調査することができた。しかし、溝の中央での調査であったため、溝の規模や存続時期を把握するには至らず、不溝の残る内容となった。また、全体が近世遺構内であるため、中世の状況については明らかにできなかった。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景（北から）



3. 東壁土層断面

ひらのしじんや

(19) 平野氏陣屋跡 第10次調査

所在 地 田原本町字奥垣内756-6

調査面積 45m²

調査原因 個人住宅の建築

担当者 清水琢哉

調査期間 1998.4.20~4.30

遺物量 24箱

位置・環境 平野氏陣屋跡は標高48m前後の沖積地に立地する。近世に田原本を領した平野氏の陣屋跡であるが、近年の調査で中世豪族居館跡を利用して陣屋を营造していることが明らかとなってきた。

今回の調査地は、陣屋中心部、平野氏の居住区のあった字奥垣内の北西に隣接する。絵図では家臣の屋敷地として描かれている。

- 検出遺構**
- 中世：大溝1条、井戸2基
 - 近世：大溝1条
 - 近代：溝1条、方形土坑1基、桶埋置土坑1基、ピット群

中世の井戸の1つは、曲げ物を3段重ねて井戸枠としていた。12世紀ごろの遺構であろう。中世大溝は南北方向で、幅約5m、深さ1.2mを測る。15世紀ごろの遺構であろう。

近世の大溝は南北方向で、幅5.5m、深さ1.7mを測る。

近代の方形土坑は、近世人溝に重複して掘削されている。大溝の再掘削の可能性もある。

- 出土遺物**
- 中世の井戸からは、瓦器陶片、土師皿などが出土した。近世大溝からは、土師皿、陶磁器、焼塩壺などが出土した。近代の方形土坑からは、下駄が数点出土した。

まとめ 今回の調査では、鎌倉時代、室町時代、近世、近代の4時期にわたる遺構が検出された。その結果、本調査地付近は、鎌倉時代には集落が形成されていたことが明らかとなった。室町時代の大溝は、中世豪族田原本氏の居館のものであろう。

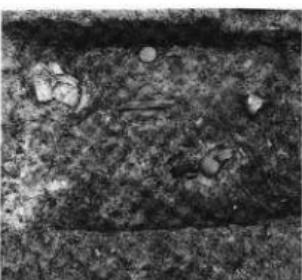
近世の大溝は、調査地中央付近で検出された。この溝の東側が道、西側が家臣屋敷となっていたと考えられる。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (西から)



3. 近世大溝遺物出土状況

た わ ら も と じ な い ち ょ う

(20) 田原本寺内町遺跡 第3次調査

所 在 地 田原本町字清股毛24-1

調査面積 210m²

調査原因 屋内運動場の建築

担当者 清水琢哉

調査期間 1998.6.8～6.24

遺物量 4箱

位置・環境 田原本寺内町遺跡は標高48m前後の沖積地に立地する。田原本に封じられた平野氏の初代長泰は、浄土真宗の教行寺に寺内町を築かせ、領地の支配を委ねた。しかし、2代目長勝の時に寺内町の東に陣屋を造営し、領地の直接経営に乗り出した。そのため教行寺との間に対立が生じ、教行寺は退去を余儀なくされた。教行寺の退去後、寺内町として成立した町並みは陣屋町として発展していった。

今回の調査は、田原本中学校のプール跡地に屋内運動場を建設する工事に先立つもので、遺跡の南端に位置する。古絵図では、寺内町の南側を区画する大溝にとりつく南北方向の溝が描かれている部分に該当する。

検出遺構 南北方向の大溝が調査地西端で検出された。調査区外に拡がるため、規模は不明である。

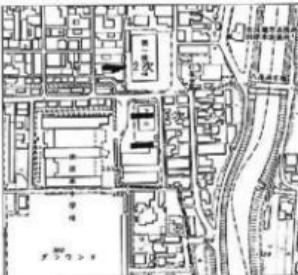
この溝と同時期とみられる南北方向の素掘小溝多数が検出された。このことから、調査地は近世～近代まで耕地だったと考えられる。

このほか、近代とみられる粘土採掘坑が8基検出された。

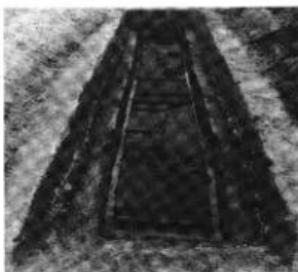
出土遺物 南北方向大溝から、近世末～近代の陶磁器などが出土した。

まとめ 今回の調査では、南北方向の大溝1条が確認された。埋没時期が近代に及ぶものの、絵図に描かれた溝と同一である可能性が高い。

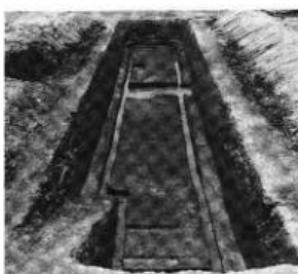
なお、本調査地は戦前から学校関連施設に利用されていた。北側隣接地には高等実科女学校があったが、この女学校のグラウンドとして昭和初期に造成が行われたという古老の話がある。調査区全体でこの時の造成土とみられる砂層が確認されている。



1. 調査地點の位置 (1 : 5,000)



2. 第1トレンチ全景（東から）



3. 第2トレンチ全景（東から）

た わ ら も と じ な い ち う

(21) 田原本寺内町遺跡 第4次調査

所 在 地 田原本町字大門町117-12

調査面積 23m²

調査原因 個人住宅の建築

担当者 豊谷和之

調査期間 1998.8.3~8.4

遺物量 1箱

位置・環境 今回の調査地は、第1次調査が行われた津島神社の南約50mの地点である。第1次調査では、寺内町を囲んでいたと考えられる幅6mの大溝が検出されている。今回の調査地は、その大溝よりも南側であり、江戸時代の古絵図には畠との墨書きがあり、居住域ではないことが予想された。ただし、古絵図では、寺内町の境となる川よりも内側に描かれており寺内町域と考えてよい。寺内町の最も南端の調査となった。

検出遺構 皆無。旧水田の削平により、江戸時代の烟土すら残っていなかった。旧水田層の青灰色粘質土の直下は、地山の黒褐色粘質土であった。調査区の東端にわずかに残存した遺物包含層の灰褐色粘質土が、畠上かもしれない。調査区の西端で、黒褐色粘質土の下層から粗砂層を検出しており、河川跡と考えられる。遺物はなかった。弥生時代以前のものと想定しているが、手掛かりを欠く。

出土遺物 土師器片、近世陶磁器片など少量。いずれも、旧水田層とわずかに残った遺物包含層から出土している。

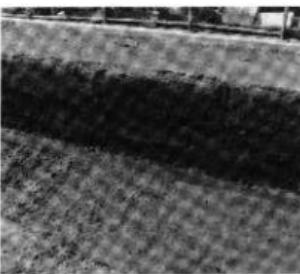
まとめ 古絵図が示す通り、本調査地は寺内町のはずれであり、遺構は検出できなかった。古絵図にある江戸時代の畠造構については、水田に転用された段階で、削平されたようである。わずかに残存した灰褐色粘質土が、その畠土の可能性をもつが定かではない。調査面積が約23m²と小さいことにも起因するのであろう。しかし、古絵図の範囲である限り、ねばり強い調査を行い、寺内町縁辺部の実態を明らかにしていく必要がある。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



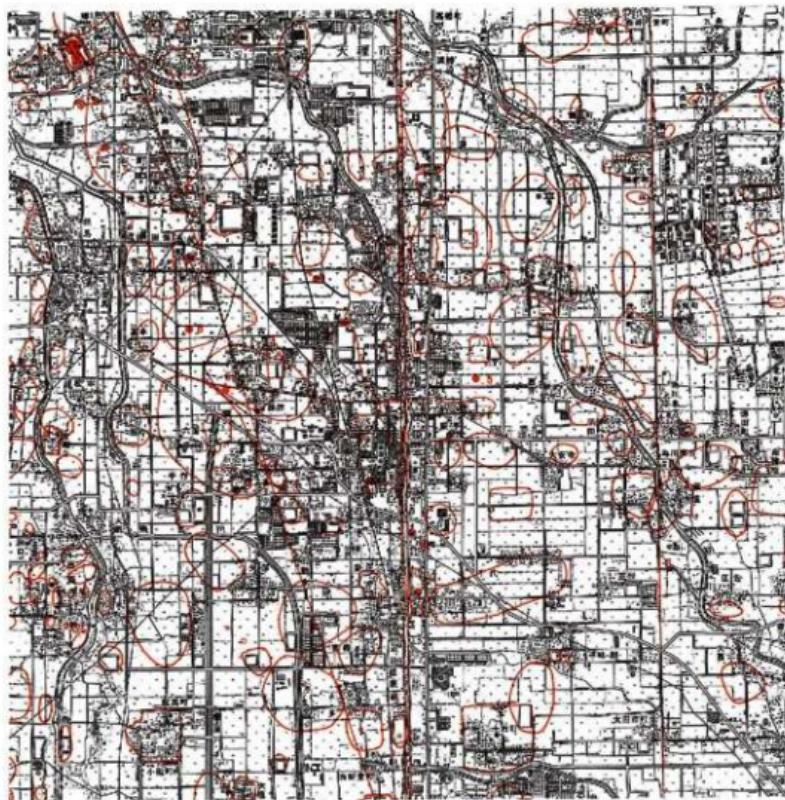
2. 北壁土層断面（西から）



3. 北壁土層断面（南から）

III. 試掘調査・立会調査の概要

1998年度に行った立会調査は10件である。このうち、保津・宮古遺跡での宅地造成に伴う擁壁工事で行った立会調査(6)では、縄文時代～古代の遺構が検出されたため、急速遺構の掘り下げ・実測を行った。古代の方形土坑は、南北2.7m、深さ1.1mと大規模なもので、井戸の可能性が考えられる。この他の立会調査は、千代遺跡(2)・羽子田遺跡(7)で河道堆積を確認したのみであり、その他の調査では客土内の掘削にとどまっていた。



田原本町の遺跡と試掘・立会調査地点

第3表 1998年度 立会調査一覧表

番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	連絡番号 (由教文)	連絡日	調査日	内 容
1	遺物散布地 (11-C-47)	田原本町新木 1-76	福山ハウジング	個人住宅建築	27	98. 4. 15	98. 5. 27	浄化槽設置部分で立会。掘削は0.8mに及ぶが客土内であった。
2	千代遺跡	田原本町千代 327-4地	吉岡秀典	賃貸住宅の建築	450	98. 3. 23	98. 7. 29	掩壁基礎掘削時に立会。造橋・遺物はみられず、河道内とみられる。
3	十六面・ 薬王寺遺跡	田原本町薬王寺 86-1	中川忠夫	共同住宅建築	98	98. 6. 4	98. 9. 10	掘削が客土の範囲内であったため不明。
4	十六面・ 薬王寺遺跡	田原本町薬王寺 368-22	鶴原寿彦	個人住宅建築	339	98. 11. 6	98. 11. 24	改良を行なう深さ1mまでを試掘。客土内であった。
5	-	田原本町駅手 74地南側水路	田原本町	水路工事	-	-	98. 12. 28	掘削は0.6~0.8mであったが、造橋・遺物ともにみられなかつた。
6	保津・ 宮古遺跡	田原本町十六面 53-1	吉村寿正	個人住宅建築	439	99. 1. 25	99. 1. 11 ~1. 12	造成に伴う掩壁基礎掘削部分で立会。縄文時代の落ち込み、弥生時代の土坑、古代の土坑、古代の小溝、中世の小溝などを検出。須恵器などの土器片が遺物箱1箱出土。ただし遺物密度は高くなかった。
7	羽子田遺跡	田原本町八尾 366-3	福井綱臣	農業用倉庫建築	421	99. 1. 4	99. 1. 19	改良を行なう深さ0.74mまでを試掘して確認。河道地盤内であることが判明した。
8	保津・ 宮古遺跡	田原本町宮吉 395-1	ならコープ	液体貯蔵ガス設備 の建設	316	98. 10. 20	99. 1. 25	1m以上の客土部分での工事で、掘削は客土内に収まつた。
9	田原本寺内町 遺跡	田原本町 110-6地	奥井敬造	個人住宅建築	364	98. 11. 24	99. 2. 15	深さ40cmの掘削で、造橋面には達していない。
10	下ヶ道	田原本町千代 360-1地	御中西文山堂	工場の建築	389	98. 12. 9	99. 2. 25	深さ0.9mまでを試掘坑を設けて確認。客土内。

田原本町埋蔵文化財調査年報 8
1998年度

平成11年3月31日

編集発行 田原本町教育委員会
印 刷 明新印刷株式会社

